平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

ふりがな	はちおうじしりつゆぎちゆうおうしょうがっこう
学校名	八王子市立由木中央小学校

校 長 名：飯田　薫

所 在 地：東京都八王子市下柚木２５番地

電話番号： 042-676-8408

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	国語

≪研究主題≫

学び合い、高め合う学習力の育成 ～読む能力を高める国語授業の創造～

【研究の要点】

1　研究主題設定の理由

新学習指導要領では言語活動の充実が柱となっており、読むことを中心に児童同士の交流を通して話し合い学び合う力を育てる研究を目指し研究主題を設定した。言葉を通して自らの考えを広げ深めることができる力が育成されるものと考える。

2　研究活動及び成果と課題

(1) 重点１「言語活動を通した文学的文章を読む能力の育成」

① 具体的な取組

ア.　身に付けさせたい力を実現させる言語活動の設定

イ.　読書に親しみ、物語を楽しく読み深める態度の育成

（ア）物語のストーリー展開全体に着目する読み（全体読み）の指導過程の工夫

（イ）物語のシリーズ本や関連本の読書や読み聞かせ

ウ.　授業後の学習指導案の再構築と研究活動の継続

②　成果と課題

ア. 言語活動を中心にねらうべき力を重点的に指導を行って付けさせる指導過程の作成ができた。付けたい力に応じた適切な言語活動を選定することが課題である。

イ.（ア）自分の感覚や経験に照らして物語をのびのびと想像して読めるようになり、それが友達の読みを刺激し読みの交流も深まった。指導事項をよく押さえて、児童の読みの思考過程を考えながら教材分析をしっかりと行う必要がある。

（イ）児童は教材物語のシリーズ全体を通して登場人物を幅広く解釈するよさがわかり、児童の多様な読みの違いを比べながら、読むことを楽しんで交流するようになった。読書に親しむようになり、児童の読書量が増えた。効果的な関連図書の活用を検討することが課題である。

(2)　重点２「言語による伝え合い、話し合いの力の育成」

① 具体的な取組

ア.　読みの交流・話し合いを基にした言語活動の充実

② 考察及び成果と課題

ア. 話し合いで、課題への自分の考えと根拠を形成し、友達のと比べながら考えを広げ発展させる力が身に付いた。

(3) 重点３「豊かな言語感覚の育成」

① 具体的な取組

音読、詩の暗唱、先生推薦の詩のコーナー、読み聞かせ朝会、 おすすめ本コーナー、読書サロン・学級図書コーナー

② 考察及び成果と課題

音声言語を通しての交流を楽しみ自信をもって行い、発表や話し合いで分かりやすく伝えようと努力する姿勢につながった。言葉を豊かに体感させる言語環境を創造したい。

(4) 重点４「発達の段階に応じた学び合いの指導」

① 具体的な取組

ア.　学び合いの場の設定

（ア）読みの交流場面における話し合いの課題設定の仕方

（イ）児童同士の相互評価の実施

イ.　学び合いの指導技術

友達の発言をつなげる「型」の学級全体での共有化

ウ.　学び合いの学習環境

教室掲示、ワークシートや音読カード、評価カードなど

② 考察及び成果と課題

ア.（ア）児童の必要に応じた話し合いの課題設定と目的を明確にした課題設定ができるようになった結果、児童の読みの交流や話し合い活動が活発になった。

（イ）友達の学習の仕方を自分の学習に生かすことが、向上しようという意欲や学習方法の定着につながった。

イ.話し合いの基礎的知識・技能が身に付き、自分の考えを友達の考えと比べつなぐことができるようになってきた。

ウ.読みに必要な情報を共有できる環境を創造したことで、児童の学習意欲が向上し、お互いの読みを知り自分自身のよい気付きや思考のきっかけにしながら読み、交流を深めていくことができた。

Ⅰ　研究指定校の概要

1　学校・地域の特色及び実態

本校は、東京都の多摩ニュータウンに位置し、新興住宅街と昔からの住宅とが混在し、今年で創立138周年を迎える。保護者、地域は学校教育に協力的で、PTA活動も盛んである。素直で活発な児童が多いが、全国学力・学習状況調査では、言葉による思考力・判断力・表現力等、基礎的・基本的な知識・技能を活用する力が課題であることが分かった。

2　学校の概要

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計
学級数	3	3	3	3	4	4	0	20
児童数	105	101	109	109	131	133	0	688

教員数　２８ 名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

1　研究主題等

(1) 研究主題

学び合い、高め合う学習力の育成
～読む能力を高める国語授業の創造～

(2) 研究主題設定の理由

全国学力・学習状況調査から、言葉による思考力、判断力、表現力等を生かして、基礎・基本的な知識・技能を活用することに課題があることが分かった。そこで、言葉を大切にした国語の内容を話題にした、日常のコミュニケーションを楽しみ、話し合い、教え合い、助け合って学習する児童を育成していかなければならないと考えている。

新学習指導要領では、言語活動の充実が重要な柱となってきている。そこで、本校では国語科において読むことを中心に、児童同士の交流を通して話し合うこと、助け合って学び合うことの力を育てる研究を目指して、本研究主題を設定した。そこでは、言葉を通して自らの考えや感じ方を広げ深めることができる力が育成されるものと考える。

(3) 取組体制

①研究の構想と進め方の確認

研究テーマをよりよく追究していくための研究構想と研究活動の進め方、具体的には、研究授業の実施方法や、協議会の持ち方、成果と課題のまとめ方を研究全体会で確認し共通理解をした上で、各学年分科会において、どのように取り組むかを具体的に検討し、研究授業で実践する計画を立てる。

②年間６回の研究授業と協議会の実施

検討された手立てをもとに、各学年分科会で研究授業を実施する。その後の研究協議会は研究授業を実施する学年分科会が提案する授業の視点をもとに、参観者から意見を集約したり、講師の先生から助言指導を受けたりすることによって進め、手立てを検証し、学習指導法の改善向上に努める。

③年間を通した研究実践

各学年分科会での授業検討や、他分科会の研究授業の参観、協議会での意見交換、研修会講師から頂いた指導で学んだことをもとに自分の学級の授業の中で実践しながら、そのような過程でさらに自分として深めていく方法により、年間を通して研究実践していく。

④講演会の実施

講演会をもち、学び合い伝え合う学習活動を通して助け合っていく豊かな心の育成や、新学習指導要領の趣旨に沿った国語科授業の創造及びそれらの活動の進め方について研修する。

⑤研究アンケートの実施

研究アンケートを実施することで、児童の現在の課題や今後身に付けさせたい

力を明らかにして、それを教材研究や指導過程の作成に生かしたり、児童の変容を把握し研究活動の成果と課題を明らかにしたりする。

⑥研究の成果と課題の確認

各学年分科会ごとに二年間の研究活動の成果と課題を考察する。それを学校全体で集約し、研究活動の二年間の成果と今後の課題をまとめて共通理解していく。

⑦研究紀要の作成

研究活動の軌跡を残しそれを今後に生かしていくために、研究年度末に研究紀要を作成する。

⑧研究組織

○校内研究部

各学年分科会の意見をまとめた代表者で構成する。研究構想、研究授業・協議会の方法、成果と課題のまとめ方等の研究活動全体を企画・決定する。

○研究全体会

研究構想、研究授業・協議会の方法、成果と課題のまとめ方等の研究活動全体を確認し、共通理解をする。研究授業・協議会での検証、勉強会を行う。

○学年分科会

各学年教員に専科教員が加わり構成する。よりよい研究活動のための意見を交換する。研究計画をうけて、各分科会ではどのように取り組むかを具体的に検討し、研究授業で実践する計画を立て、提案授業を行う。

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	4,5月	研究構想・指導案作成の方法
		研究内容に関する研修
	6～10月	研究授業での授業実践
		研究協議会による研究 仮説の検証
		研究内容に関する研修
	9,12月	児童実態アンケートの実施
	11,12,1月	学習指導案の再構築
		今年度研究活動の成果と課題の集約
	2,3月	研究紀要の作成と来年度研究構想の確認
平成22年度	4,5月	研究構想・指導案作成の方法の確認
		研究内容に関する研修
	6,7月	研究授業での授業実践
		研究協議会による研究仮説の検証
		研究内容に関する研修
	8,9月	学習指導案の再構築
		2年間の研究活動の成果と課題の集約
		研究紀要の作成
	10月	研究発表時の学習指導案の作成
	11月	研究発表会の準備と研究発表会の実施
	12～3月	学習指導案の再構築
		今年度研究の振り返り
		来年度研究構想の検討

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究の重点１

言語活動を通した文学的文章を読む能力の育成　～新学習指導要領が目指す読む能力を育むための指導過程を創造する～

① 具体的な取組

ア.　身に付けさせたい力を実現させるための言語活動を設定する。

１　前単元までの学習経験や身に付けた力など児童実態の分析

①これまでどんな力を付けるために、どんな学習指導をしてきたか。

②その結果、どんな力が身に付いたか。

③しかし、まだ身に付いていない力は何か。

⇩

２　身に付けさせたい力を実現させるために有効な柱となる言語活動の選定

⇩

３　遂行する上で必要となる能力のリストアップ

①既に身に付いていて活用する力

②当該単元で重点的に指導する力

③次単元以降で重点的に指導する力

※言語活動によっては、その言語活動が構成されるパーツごとに分けての具体的な能力の分析

⇩

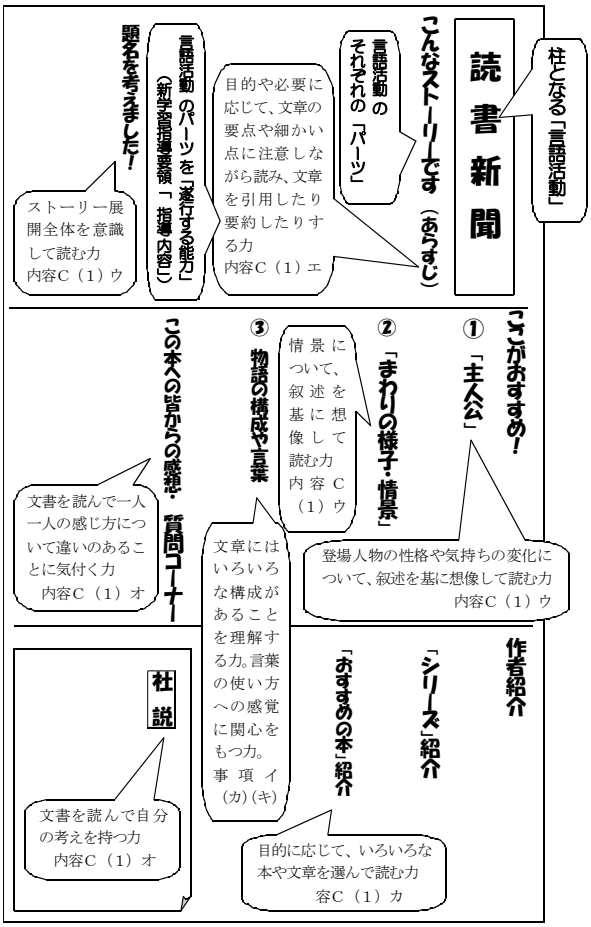
4　教材の決定と分析

⇩

5　指導過程の構想

●「読書新聞を書く」という柱となる言語活動を設定した例（３年生）

それぞれ新聞記事のコーナーが、「読書新聞を書く」という柱となる言語活動の中のそれぞれのパーツになる。このそれぞれのパーツを書き上げる、つまり遂行するために、必要となる児童の能力（新学習指導要領の指導内容との関連）を具体的に分析する。



イ．　読書に親しみ、物語を楽しみながら読み深めていく。

（ア）物語のストーリー展開の全体に着目する読み（全体読み）の指導過程を工夫する。

○お気に入りと手がかり（新学習指導要領の指導内容）

その根拠

○一人読みと読みの交流

○探読、精読、再読

○読みの視点や読みの課題の設定

（イ）物語のシリーズ本や関連本を読んだり読み聞かせたりする。

○単元の導入

○単元との並行読書

○単元後の本の紹介

●物語の「全体読み」と「関連読書」を設定した指導過程の例（１年生）

～『けむりのきしゃ』（教育出版）

８時間扱～

従来の指導過程

	学習活動
第一次	①題名『けむりのきしゃ』から想像したことを話し合う。
	②四つの場面の挿絵から見付けたことや気付いたことを発表する
第二次	③(一)の挿絵や文を見て思ったことを発表する。
	④文を読む。挿絵を見ながら、提示されている文を詳しく言い表したり、文を付け加えたりする。
	⑤前時に学習した場面と(二)の挿絵や文を比べて、変わったところを見付ける。
	⑥前時に学習した場面と(三)の挿絵や文を比べて、変わったところを見付ける。
	⑦ (四) の場面を読み、流れ星がおじいさんにお礼を言っている様子を読み取る
第二次	⑧自分の気に入った場面を一つ選んで絵を描き、想像したことを書き込み発表し合う。

⇩

新しい指導過程

	学習活動
第一次	①３冊の本の読み聞かせを聞き、好きな本を選びその理由を考え発表する。 ・ぶたくんと１００ぴきのおおかみ ・メリークリスマスおおかみさん ・さんせーい！　　(３冊ともに作・絵　宮西　達也)
第二次	②絵本「ぼくのくれよん」の読み聞かせを聞き、自分のお気に入りの場面を一つ選んで理由を発表する。
	③絵本「ぼくのくれよん」の自分の気に入った場面を一つ選んで絵を描く。
	④絵本「ぼくのくれよん」の自分の気に入った場面の絵に本文を写し、想像したことを書く。
	⑤絵本「ぼくのくれよん」の想像したことを発表する。
第三次	⑥「けむりのきしゃ」の読み聞かせを聞き、自分のお気に入りの場面を一つ選んで、理由を発表する。
	⑦お気に入りの場面の絵を描き、本文を写す。
	⑧お気に入りの場面絵に想像したお話や登場人物のせりふなどを書き足し発表する。

ウ．　研究授業後、学習指導案の再構築を行い、研究活動を継続する。

② 考察及び成果と課題

ア．新学習指導要領の指導事項を基に指導者がねらうべき力を、言語活動を中心に第２次で重点的に指導を行って児童に身に付けさせていく指導過程の作成ができるようになってきた。また、この方法が、「Ｂ　書くこと」や国語以外の教科でも実践できるようにもなってきた。

　新学習指導要領の「言語活動例」の内容も参考にして、児童の実態に対して付けさせたい力に応じたより適切な言語活動を選定することが必要であると考える。

イ．（ア）自分の感覚や経験に照らし合わせながら物語をのびのびと想像して読むことができるようになった児童が増えて「ぼくはこう読むんだけど」「こういう気持ちもあるんじゃない」「ぼくのお母さんならこうなんだけど」「前に自分が読んだ本ではこうだったから」というような声が、読みの交流の場面で多く聞こえるようになった。それにより、目的に応じて本や文章を選んで読む能力を身に付けさせていく指導が可能になってきた。児童のつぶやきが友達の読みへと波及して、読みの交流が深まることが多くなった。「一人で読むよりみんなで読んで楽しかった。」「最初自分が一人で読んだ時と段々違ってきておもしろかった。」という感想や話も聞こえてくるようになった。

　全体読みの指導過程を作成していく上では、指導者が指導要領の指導事項をよく押さえて、児童の興味や疑問を把握し、児童の読みの思考過程を考えながら、教材分析をしっかりと行っていくことがより大切であると考える。

（イ）児童は教材物語のシリーズ全体を通して登場人物を幅広く解釈することのよさを理解するようになってきた。教科書の文章や絵に対して、物語のオリジナル本や再話本等との違いを比べて、楽しみながら読むこともできるようになってきた。このような児童の多様な読みのそれぞれの違いを比べながら、読むことを楽しんで交流し児童がお互いに読みを学び合っていくことができるようになってきた。シリーズ本等の関連本の読書活動を単元の学習過程の至る所で行うことで、いきいきと読書に親しむ児童の姿が多く見られるようになり、それが児童の読書量を確保することにもつながった。

教材物語の読みを深める効果的な関連図書の活用についてさらに検討し、これらを踏まえて教材研究をいっそう深めていくことが課題である。また、学級図書の時間の有効活用や発達段階を踏まえた学年間の系統的読書指導の方法、また、ＰＴＡの図書ボランティアの方との連携も大切となる。

（２）研究の重点２

言語による伝え合い、話し合いの力の育成

① 具体的な取組

ア．「対話・小集団・教室集団」での読みの交流・話し合いを基にした言語活動の充実を図る。

①自分の考えをもつ。 ②自分の考えの根拠をはっきりさせる。 ③友達の考えや根拠を自分のそれと比べる。 ④友達の考えをつなぐ。

② 考察及び成果と課題

ア．一対一の対話力を養うことを目指し、相手の考えに対して自分の感想を言ったり質問したりすることから始め、相互のやり取りをつなげる学習を繰り返し、練習を重ねるごとに自然に対話がつながるようになってきた。

養われた対話力を生かしてグループや学級全体での話し合う力につなげたい。

また、物語で読み取ったことを児童同士が話し合う活動を繰り返したことで、それが物語の読みの場面だけでなく、他の話し合いの場面でも、課題に対する自分の考えや根拠を形成し、友達のそれと比べながらさらに自分の考えを広げ深めて話し合いを発展させる力が身に付いてきた。

（３）研究の重点３

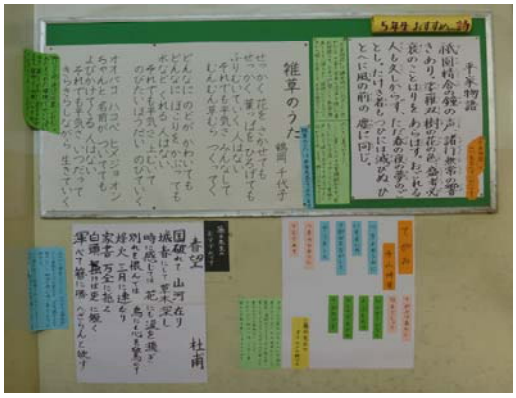
豊かな言語感覚の育成

① 具体的な取組

ア．　音読を日常の学習活動の中で、また家庭学習の中で保護者に協力してもらい取り組ませる。

イ．　詩集に載っている詩の暗唱に取り組む。図書ボランティアにも協力してもらい休み時間や放課後に「詩の暗唱カード」に挑戦させる。

ウ．　「先生が推薦する詩のコーナー」を設けて、児童と教師が一緒になって詩の音読に取り組む。



エ.　校長先生による「読み聞かせ朝会」を毎月実施し読書に親しませる。

オ.　定期的に学級ごとに図書ボランティアから読み聞かせをしてもらって、読書に親しませる。

カ.「あいの由木っこの森『おすすめ本』コーナー」で、お気に入りの本を紹介し合う。

キ.　単元に応じた「学年読書サロン・学級図書コーナー」を設置し、そこで児童同士が自由に読みを語り合える場を提供する。

② 考察及び成果と課題

音声による言語表現が少しずつ豊かになり、言葉の微妙な表現やニュアンスが伝わりやすくなってきており、児童が音声言語を通して交流することを楽しむ様子や自信をもって交流する様子が以前より感じられるようになってきた。そのことが、発表やグループでの話し合いの場面においても以前よりも相手によりよく工夫しながらわかりやすく伝えようと努力しようとする姿勢につながってきていると考える。音読や詩の暗唱を通してよい作品に多く何度も触れることは、児童の言語感覚を研ぎ澄ませ、児童の語彙を増やし、音声言語として話すことへの大きな自信にもつながると実感できた。

授業の場面だけでなく日常生活の中でさらに言葉の美しさやリズム、響き等を豊かに体感させ、言語による理解・思考・表現の能力を育むための言語環境を整えていく必要がある。

（4）研究の重点４

発達の段階に応じた学び合いの指導

① 具体的な取組

ア.　学び合いの場の設定

（ア）読みの交流の場面における話し合いの課題設定の仕方を工夫する。

〇話し合いの「必要性」に基づく課題設定の仕方

〇話し合いの「目的」を明確にした課題設定の仕方

（イ）児童同士の相互評価を実施する。

イ.　学び合いの指導技術

〇話し合いの場面で、友達の発言をつなげていく「型」を学級全体で共有化させる。

ウ.　学び合いの学習環境

（ア）教室掲示を工夫する。

（イ）ワークシートや音読カード、評価カードを工夫する。

② 考察及び成果と課題

ア.（ア）読みを交流する場面で、「感想や疑問が集中するところ・多様な考えがあり、一人では考えが深めにくいところ・友達の考えも聞きたいところ」などに話し合いの課題設定の重点を置いた結果、児童から「みんなの考えを聞いてみたい！」「話し合ってみたい！」という声が聞こえるようになった。ここから、児童の必要に応じた話し合いの課題設定ができ、児童が意欲的に読むことをを交流するようになってきた。

対話や小グループを中心とした話し合いの目的も、「友達の考えを参考にしながら自分の考えを広げたり深めたりする・適当なものを選ぶ・考えを一つにまと

める・新たに創り出す」等、児童の興味・関心や学習実態を考慮しながら話し合いの目的を明確にし課題を設定することを強く意識した結果、児童の話し合い活動が以前にも増して活発にできるようになった。

（イ）友達と学習の進め方や方法を見合い教え合ったり、完成した作品や言語活動の成果を児童同士で相互に評価し合ったりする機会を設定したことで、それらを自分の学習活動に生かしてさらに向上しようという意欲や学習の技術を高めることにつながった。

イ．　新学習指導要領の指導内容に基づき児童の発達の段階に応じて、話型や聴型、対話・話し合いの仕方等を明らかにし指導したことで、児童が聞き方・話し方・話し合いの仕方の基礎的知識・技能を身に付けながら、自分の考えを友達の考えと比べ、つないでいくことができるようになってきた。

ウ．　単元ごとに学び合いコーナーを設置し、そこに児童が自由に書き込み、児童が知りたい、共有し合いたい情報を交換できる場を提供した。そのことで、学習への意欲が向上し、児童自身の読み、児童同志の読みの交流が深まった。さらに、児童の関心や思考過程、学習活動や学び合いの意識の方向性を指導者が知ることで、教材研究や指導過程の作成、学習の進め方に生かすこともできるようになった。

物語全文をひとまとめにしたワークシートを作成し、学習過程で児童に自由に書き込ませ、それを読みの交流の際に活用した。友達の読みを児童同士が見て理解しやすいものとなり、読みの交流が活発に進んだ。それが自分の学びや友達との学び合いの過程を残すことにもなった。さらに、ワークシートの拡大コピーを掲示して休み時間に児童に自由に書き込ませることで、児童がお互いの読みを知り、自分自身のよい気付きや思考のきっかけとしながら、学び合いを創り出すこともできた。

3　研究の成果と課題

文学的文章を読む能力を高める研究活動を通して、どの教科においても児童が学び合い高め合うことができる力を育成することを目指してきた。

児童に身に付けさせたい力に応じた言語活動を精選し、物語の全体読みや関連本の読書を通して児童が楽しく読み進めながら幅広く読んでいける指導過程を指導者が工夫して作成することで、児童の読みの交流を深めること。また、話型・聴型・話し合いの仕方等をしっかりと指導して学級全体で話し合いの型を共有化したり、日常の中で読書や音読に親しませるなど豊かな言語感覚を育成したりすること。これらが、児童同士の豊かな学び合いを創造させていくことが二年間の研究活動を通して実感できた。

しかし、これらの研究活動の成果が児童に還元され、児童に身に付いた力となって真に現れていくのはこれからである。これまでの研究活動の成果を、今後さらに学校現場での授業実践として積み上げていくことこそ最も大切なことであると考えている。

平成22年度研究成果報告書≪教育課程≫

学校名	彦根市立城北小学校

校 長 名：武田　和男

所 在 地：滋賀県彦根市松原町3751-3

電話番号：0749-22-5771

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	国語

≪研究主題≫

くらしの中で　生きて働く言語の力の育成をめざして

【研究の要点】

１．付けたい力を明確にし、言語活動を位置づけた学習指導案と指導構想の改善

単元の学習前における児童の言語の実態，単元で付けたい力，設定した言語活動，単元の学習後の付けた力の活用の一連の指導構想を１ページの指導案で表すことにより，活用を見据えた指導の全体構想をつかむ。

２．読む能力を読書へとつなぐ授業の改善

国語科単元構成と指導計画の工夫により，国語科で付けた読む能力が，児童の読書生活に生きて働くことができるようにする。また，家読（家庭での読書）の取組により，保護者が児童とともに感想等を話し合うなど家庭における読書の改善を図る。

３．　日常の言語活動の充実

朝の言語活動の時間（読書タイム・きらりタイム）における音読活動やミニ作文，おはなし活動（ボランティアによる読み聞かせ）の継続や充実を図る。そのことにより，読む活動や書く活動に楽しく主体的に取り組むことができるようにするとともに，その積み上げを国語科の授業改善に生かすようにする。また，学校での朝読と家庭での家読をつなぐ言語活動としても機能できるようにする。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

本校は，琵琶湖の北東部彦根市の北の端に位置し，近くに彦根城，鳥人間コンテストのある松原浜など豊かな環境に恵まれ，静かで落ち着いた地域である。近年新興住宅地が増えつつあり，保護者の価値観が多様化している。児童は，与えられた課題に対して，根気よく取り組めるが，自主性・創造性の面では，やや弱さが見られる。

２　学校の概要（平成22年4月5日現在）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計
学級数	2	2	2	1	2	1	3	13
児童数	43	37	56	35	50	37	7	265

教員数　18名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

(1)研究主題

くらしの中で　生きて働く言語の力の育成をめざして

(2) 研究主題設定の理由

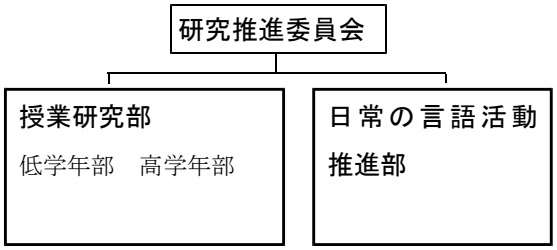
基礎的な知識及び技能を活用し，課題を解決する言語の力を育てるために，国語科で身に付けた言語の力を各教科等や日常生活の中で生かすことのできる指導方法の工夫改善を図る。

２年次は，豊かな読書生活につながる国語科の授業改善を図る。

相手や目的に応じた言語活動に主体的に取り組めるようにすることを通して，児童が互いに心を通わせる言語の使い手となるようにする。

(3) 取組体制

授業研究部と日常の言語活動部の２本立てで推進する。



(4) ２年間の主な取組

平成21年度	○付けたい力を明確化するマトリックス式年間指導計画の作成 ○活用を見据えた授業構想の確立 ○「音読活動」「読書活動」「話合い活動」を生かした授業の実践
平成22年度	○言語活動を明確にした学習指導案の改善 ○読む能力を読書活動へつなげていく授業の構築 ○日常の言語活動から家読へつなげていく取組 ○日常の言語活動の充実

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1)研究の重点

①　国語科の授業改善

②　日常生活や各教科等での言語活動の充実

③　豊かな心を育む学習の充実

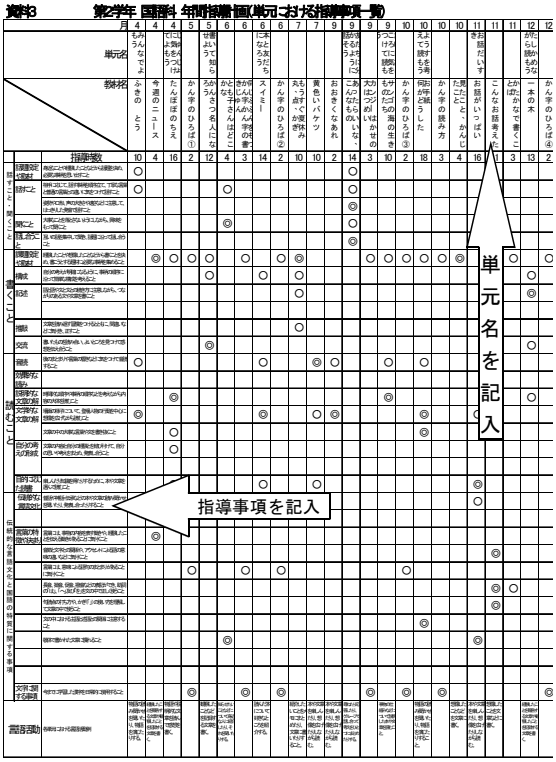
(2)具体的な取組

①　年間指導計画の改善

「付けたい力」を明確化するための指導計画等の作成と改善に取り組んだ。年間を通してどの単元でどの指導事項（付けたい力）を学習させていくかを明示した年間指導計画（マトリックス式）を作成した。（右記：マトリックス式年間指導計画）また，校内研究で「めざす子どもの姿」の学年版を作成し，前述の年間指導計画とともに単元で付けたい力の拠り所とした。

②　付けたい力や言語活動を明確にした学習指導案と指導構想の改善

本単元学習前に「付けている力」，本単元で「付けたい力」と本単元で行う言語活動の設定，学習後の「付けた力の予想される活用場面」を明記し，活用することを見据え，言語活動を明確にした指導構想が１ページで分かるような学習指導案にした。（右記：国語科学習指導案）また，単元を貫く「読書の力」を設定し，読書活動へのつながりを常に意識した授業に取り組んだ。



マトリックス式年間指導計画

城北小学校・国語科学習指導案１ページ目

③　導入の工夫

単元の導入では，児童がお話の世界に浸れるように，場を工夫して教材文を読み聞かせたり，児童になじみ深い同じ作者のお話から入ったりした。６年生の教材「森へ」では，コンピュータ室を暗室にし，スクリーンに教材文の写真を写しながら朗読して，全員が森への世界に浸れるようにした。また、少人数指導の教師と協力して，担任が朗読をしながら授業を進めるとともに，少人数担当が朗読に合わせて，写真をズームアップするなどして，効果的に提示する工夫を行った。

６年生　導入の工夫

また，児童と話し合いながらイメージマップをつくるなど単元学習の見通しをもたせた。

④　読みの視点

低学年では，「お気に入りの登場人物の行動や様子」，中高学年では，「効果的な表現」「登場人物の生き方・考え方」などから話し合いながら読みの視点を立て，読みを進めた。

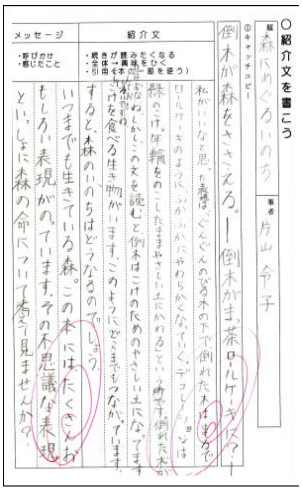
６年生　学習の見通しと読みの視点

⑤　読みの交流

読みの視点に沿って読み進めたことをグループで出し合い，話し合った。その際，児童の読書経験を生かし，教材文と比べながら自分の考えを交流し合った。６年生の児童は，自分が見つけた表現の工夫をまず伝え、そこから感じたことを話した。命のつながりという視点において，「サケが森を作る」という表現から，「サケが死んでもその体が小さな生き物たちに食べられ川を作り，森ができていることに感動した。」など，海や川での命のつながりについて，想像を巡らせる子や，「倒木からキノコが生えていた」という表現から，倒木が森の他の植物に役に立っていることに気づき，森の生き物の命のつながりについてピラミッド図を書く子など，心惹かれた表現に立ち止まることで，自分の考えを深めることができた。

６年生　グループで読みの交流

交流後の感想では「同じ視点なのに違う表現を見つけ，考えを聞いていると，とても楽しかった。」「同じ表現を見つけていても，考えていることが違い，そんな風に考えるのかと，さらに深く考えることができた。」など，交流によって変化した自分の思いに気づくことができた。また，「もっと自然に関する本を読みたい。」「海の中の命のつながりを読んでみたい。」「星野さんの本を探したい。」などと，読書活動へ思いを巡らせる子も多かった。そして，次の言語活動である「本の紹介」や「読書会」へつなげていった。



紹介文

単元の終末では，読んだ本の中から友だちに紹介したい本を選び，キャッチコピーを考えて紹介文を書き，交流する活動を行った。

⑥　単元の学習後における活用状況の見取り

単元を貫く「読書の力」が児童の実生活で生きて働いていたかを見取った。例えば，５年生「読書の世界を広げよう」では，読書の力「ちがう分野の本を読む」にかかわり，学習前と学習後の読書マラソンカードを比べることにより見取った。また，１年生では，学習した教材文「はなのみち」を紙芝居にした

ことで，家の人へも紙芝居で紹介をした。

⑦　読書活動の充実

『一人年間５０冊完読』を目標にして読書に取り組んでいる。本年度は，読書マラソンカードに本の種類の項目を設け，種類ごとのシールを貼ることで読む本の種類が意識できるようにした。また，学校で読書したことを家読ワークシートで家の人と一緒に書くことにより，家庭での読書へつなげていく取組も行った。

読書マラソンカード

おうちの人（　　）とえんぴつでおしゃべり！

～おきに入りの本についておしゃべりしよう！

４．５．６月にいろいろな本をよんできましたね。
ぜひ、その中でお気に入りの本について、おうちの人と読みあい、
お話のかんそうをおしゃべりしよう！

おしゃべりのしかた

※ しょうかいしたい本をもってかえろう！

2．　おうちの人（　　）と本について、おしゃべりするじかんをつくってもらえるようおねがいしよう！
※ ゆったりとしたじかん、しずかなところがおすすめよ！

3．　しょうかいしたい本を見せながら、どんな話なのか、話のおもしろさ、おもったことなどを話そう。

4．　その本を、おうちの人にも読んでもらおう！

5．　かんそうをきこう！
※ かんそうをきいて自分でかくか、ちょくせつかいてもらうか、どちらでもいいよ。

6．きりとりせんできって、学校にもっていこう。いえでおしゃべりしたことを先生にもおしえてね。

学校では『朝読』、家庭では『家読』を
～家族で読書　つながる心～　パート１

⑧　音読活動の充実

継続的に音読活動（週２回ずつ８年間継続）に取り組んでいる。当初は，人前でも大きな声が出せるようにと始められたが，今では，音読でいかに情景や思いを表現していくか，ということを目標において取り組んでいる。朝の音読の時間に加え，国語科の授業でも２週間に１単位時間程音読の時間を設けている。

音読活動の成果を学期１回の音読集会で発表している。音読集会では，「読みを心にのせて伝える」ということを目標に音読をし，取り組んでいる。

学期１回の音読集会では，音読実行委員が主体的に会の運営に関わり，テーマに沿った学年の音読発表を司会進行して盛り上げた。

音読実行委員の活動

⑨　書く活動の充実

きらりタイムの書く活動では，長年取り組んでいるミニ作文がある。発達段階に合わせてワークシートを準備し，様々な様式を経験させ，週2回のうち，火曜日にメモ書きをして，金曜日には文章として仕上げるようにしている。作文の題材としては，学校行事やその時々の話題やテーマで書いたり，本の紹介や家読に関するテーマで行ったりしている。また，書いた作品を校内放送で　発表したり，「きらり賞」を設け，よい作品をみんなの前で発表したりしている。

ミニ作文を放送で発表

⑶成果

①活用を見据えた授業構想（学習指導案の改善）により，前後の単元や各教科等との関連を図りながら，読書の力を付けるために有効な指導過程を作成することができた。

②単元での「付けたい力」を明確化し，授業構想をする中で，その単元において重点となる学習指導要領の指導事項について検討を加えることができた。

③読むことの教材については，物語全体の展開をイメージしながら，心に残ったところや気に入ったところ，読み深めたいところを読み合っていく学習展開に重点を置くことがで

きた。

導入の工夫

・児童が興味・関心を高め，お話の世界に浸るための工夫ができた。
・児童と話し合いながら，単元全体の学習の見通しを示していく工夫ができた。

読みの視点をもたせる工夫

・お気に入りの文章や登場人物の行動，効果的な表現，自然や生き物の不思議さ等の読みの視点をもつことで，自分の考えをもって主体的に読んでいくことができた。

個々の読みの交流の仕方の工夫

・交流する目的や方法を明確にもつことができ，次の言語活動へつながる交流ができた。

日常の読書や家読につながるような工夫

・本の紹介や読書会等の言語活動を設定することにより，読む能力を日常の読書につなげていくことができた。
・単元で学習したことを生かした家読の取組みをすることにより，学校で付けた力が活用されると共に，読書を通した親子の交流や学校と保護者の連携が図れた。

④読書につながる授業改善をすることで，日常に読む本の種類に変化が見られた。低学年はシリーズ読みを，中高学年は普段なかなか読む機会の少ないジャンルの本を読むことができるようになった。

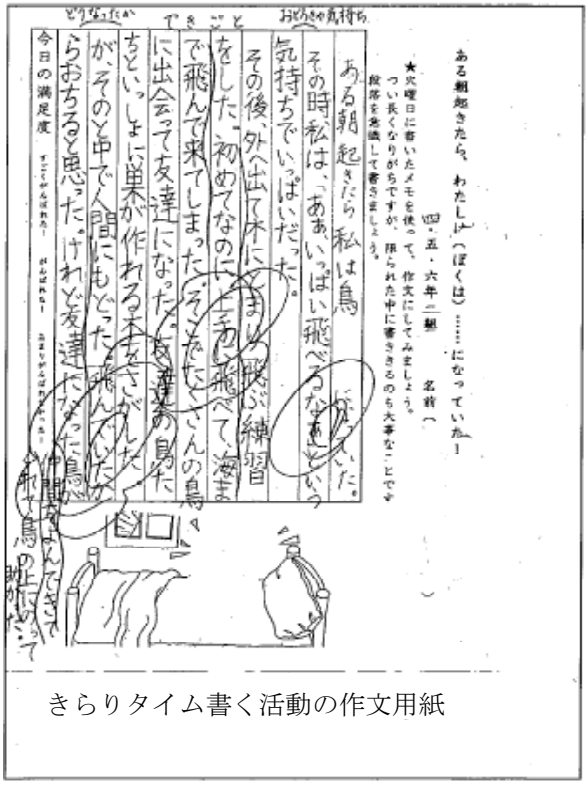
⑤きらりタイムの書く活動では，書きたいことをため込んだり，メモしたりすることで書くことへの抵抗がなくなり，「書けた」という喜びを味わうことができた。また，ミニ作文で書いたものを発信する機会を設定したことで，意欲的に書くことができた。

⑥音読集会を実施するなど，全校で音読を大切にした取組を進めることができた。

音読集会

２年生のスイミーの学習では，音読を効果的に取り入れるため，次のような取組を行った。読みの導入の音読では，話の大体の筋をつかみ，好きな場面を音読する。また，単元の途中の音読では，お互いの好きな場面の音読を聞きながら読みを深め広げていく学習を進めた。特に単元の途中と終末の音読では，動作化やペープサート等と併用することで効果的に学習を進めることができた。

主人公の思いを音読する児童



ある朝起きたら、わたしは（ぼくは）……になっていた

きらりタイム書く活動の作文用紙

(4)課題

①説明的な文章の解釈を指導する単元において，文章等への興味・関心を高めることと，段落相互の関係や接続語の役割等の理解を重ね合わせることが難しかったため，一層の指導方法の改善が必要である。

②付けたい力を明確にし，指導過程に応じたノートやワークシートの工夫が必要である。

③発達段階に応じた話合いの指導をしていくことが必要である。また，話合いが成立するためには，良好な人間関係を築き，司会をする力等をつける必要がある。

１年生の「はなのみち」の紙芝居を家の人に聞いてもらった後の家の人の感想

３　研究の成果と課題

(1) マトリックス式年間指導計画は，２学年を見通して，どの単元のどの指導事項が関連しているのかが一目で分かるため，付けたい力を明確化するのに有効であった。とりわけ，１年間で同じ指導事項を指導する教材において，どの教材でどのような力をつけたいのか計画を立てることができた。(右記資料参照)

(2) 言語活動の設定と付けたい力の明確化を図り，活用を見据えた授業構想の構築ができた。

(3) 児童の読書生活の変容につながる「読むこと」の授業改善に取り組むことができた。

(4) 言語活動を磨く活動を日常的に継続することで国語科と他教科や日常の言語活動との連携を図り、言語の力を一層付けることができた。さらに、家読の取組により、家庭との連携を図ることができた。

(5) 「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域における，新学習指導要領の趣旨を生かした取組の実践については，今後の課題である。

6年「読む力」を育てる単元の年間の見通し ＜主に文学的な文章の解釈を指導する単元＞				
単元名		本に親しみ 自分と対話しよう	文章を読んで、自分の考えをもとう	表現を味わい、豊かな表現をしよう
教材名		カレーライス	短歌・俳句の世界	やまなし・イーハトーヴのゆめ
指導時期・時数		4月⑦	5月③	10月⑧
音読	自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること	○	○	
効果的な読み	目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること			◎
説明的な文章の解釈	目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係をおさえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること			
文学的な文章の解釈	登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。	◎	◎	◎
自分の考えの形成及び交流	本や文章を読んで考えたことを、発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。	○		○
目的に応じた読書	目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読むこと			○
設定する言語活動		・ぼくと父さんの気持ちの移り変わりを読む ・登場人物になりきって文章を書いたり、自分の体験を文章に書いたりする	・短歌や俳句を音読する ・好きな短歌や俳句を理由を述べて紹介する	・二枚の幻灯から作者が伝えたかったことを読み、交流する ・作者の生き方・考え方を話し合う
付けたい力		・登場人物の心情を言葉から想像して読む ・見えないことに想像をめぐらし、文章を書く	・繰り返し音読することでリズムや表現の美しさを感じ取る ・情景を想像しながら読む ・身近な文語体の文章や詩を読む	・叙述に即して想像しながら読む ・効果的な表現（比喩・擬音語・擬態語）を味わいながら読む ・同じ作者の他の作品を読むことで、生き方や考え方に触れる

６年　読む力の年間の見通し

	月	火	水	木	金
読書タイム 8:20~8:30	読　書　活　動				
きらりタイム 8:30~8:40	音読 活動	書く 活動	音読 活動	おはなし 活動	書く 活動

城北小学校・朝の言語活動の時間